慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて
Sub Title	On The Earthenwares from Shell-Mound of Sambu-Ubayama, Chiba pref.
Author	鈴木, 公雄(Suzuki, Kimio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.1 (1963. 8) ,p.67- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630800-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

千葉県山武郡横芝町姥山

山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて

鈴木公雄

一　序

去る昭和卅七年十二月、早明慶の三大学考古学研究室が合同し、各大学の調査になる関東地方晩期縄文文化に関する資料の公開と研究討論会が開かれた。筆者は偶々、千葉県山武姥山貝塚[1]の晩期縄文土器の整理を担当していたために、その席上において上記貝塚の土器についての説明を行う機会を与えられた。今般清水潤三教授より本誌上にその概要を発表するようお奨めを受けたので、ここに報告する次第である。[2] なお、山武姥山貝塚は清水教授の千葉県栗山川渓谷における考古学的地域調査の一環として調査せられたものであり、遺跡の概要については既に予報が公にされており本遺跡のみの報告も準備されつつある。[3] それ故本稿においては晩期土器の問題についてのみとりあげ、その他に関しては省略に従った。

二　出土土器の分類

山武姥山貝塚は、平坦な広い台地上にほゞ馬蹄上に分布する七個の貝塚群より成り、栗山川渓谷中最大の規模を有する貝塚であるが晩期土器を出土するZ地点貝塚は、台地の北側から入り込んだ谷頭に面する緩斜面上に位置し、その貝塚としての規模は極めて小さい。[4] しかし乍ら調査によつて採集し得た土器量は過去三次にわたる調査を合計すると、完形もしくは器形復元の可能な土器約四十五個体分をはじめとする極めて多量の資料が採集

されており、その内容も安行Ⅱ式に始り、安行Ⅲ諸型式、大洞C_1ないしC_2式並行型式、大洞A及A'並行型式などが存在し、ほゞ晩期全般の土器型式にわたつている。[5] これらの土器を遺跡における層位的関係、従来の関東地方晩期縄文土器諸型式などを参照しつつ検討すると、本貝塚の出土土器はほゞ六つの型式群として把握することが出来る。これらを姥山Ⅰ式～Ⅵ式として順次説明を加えて行くことにしたい。

姥山Ⅰ式土器

（a類）器型は口辺部が四ないし五単位の大波状に作出されやや外反する傾向をみせて直立し、胴部がややはり出しすぼまつた小平底を有する深鉢形となるものと思われる。口縁は隆起した帯縄文がめぐり、各大波頂部には扇状突起がつけられ、頸部には幅五粍ていどの細い帯縄文による三角文などがみられ、所々に縦長ないし横長のきざみ目ある突起がつけられている。土質は良好な粘土を用い焼成も硬い。色調は黒褐色ないしは安行式特有の飴色をおびた褐色を呈するものが多い。

（b類）器形は最大径が胴部付近に下がり、口辺が内弯しややはり出した胴部を有する平縁の深鉢形になる

と思われる。口辺部以下に二ないし三本の帯縄文が横走し、所々に縦長のきざみ目をつけた突起がつけられる。焼成・色調共にa類に近似しているものが多い。

（c類）口辺部と胴部に粘土紐をめぐらし、口辺はやや内傾し、はり出した胴部を有する深鉢形土器である。口辺断面は外側に肥厚し、紐線文間は水平方向に、胴部には縦方向に全面条線が施される。粘土紐間の条線はしば〳〵縦ないし斜方向に引かれた沈線、或は半円状の曲線文によつて区劃され磨消される場合があり、稀にはその磨消された部分に細い沈線文が斜方向ないし矢羽状に施されるものもみられる。色調は赤褐色、黄褐色を呈するものが多く、土質はa類・b類に比して劣る。

これらが姥山Ⅰ式を構成する土器であるが本式土器は明確な包含層が存在せず、表土・貝層下褐色土（第六層）などより小量出土しているに過ぎず、詳細にわたる分類は行えない。文様上の特徴からして安行Ⅱ式に相当するものであることは明らかである。

姥山Ⅱ式土器（第1図3・4・6・7第5図1～10）

a類（第5図1・2・8）

口辺部は四ないし五単位の大波状に作出され、口辺部

はやや外反しつつ直立し胴部がやや張り出し、すぼまつた小平底を有する深鉢形土器である。口辺の各波頂部には、扇状突起の退化形とみられる粘土貼付がつけられ、その下に沈線によつて稲妻状の区劃が施される。内部には沈線による入組文（第5図2）や突起（第5図1）・円圏文などが施される。文様部以外の縄文は磨消されており、各稲妻文の接する部分に、沈線による入組文などが描かれる場合もある（第5図1）。沈線によつて胴部と口辺を分離し、胴部に幅一糎ほどの帯縄文が横走し、以下を無文とするものが多い。焼成・土質は良好なものが多く、色調も安行式特有のやや赤みを帯びた飴色を呈するものが多い。

b類（第5図3・9）

口辺が四ないし五単位の波状に作出されやや外反する点はa類に共通するが、器高が低く、胴部以下が鍋底状のやや下ぶくれした平底になると思われる浅鉢形土器である。口辺波頂部には粘土紐貼付による小突起のつけられるものもある。口辺部は第5図3の様に斜縄文が全面施されるものが多く、まれには第5図9の様な沈線による入組文がつけられる。胴部には帯縄文が横走するものが多いが、中には平行沈線の間に点列文を施したものもみられる。焼成・土質・色調共にa類土器と一致する。

c類（第5図5）

器形はb類と同じく、口径が器高よりも大となり、やや外反する口辺と鍋底状の平底を有する浅鉢形であるが、平縁となるものを特に一括した。口辺部は幅五糎内外の比較的厚い帯縄文をめぐらし、一本の沈線によつて口辺と胴部を分ち、以下には幅一糎ていどの帯縄文をめぐらす。口唇上に小突起のつけられたもの、口辺部帯縄文内に沈線による曲線文などを施すものもあるが稀であり、多くは第5図5の様な簡素なものが多い点はb類と共通する。焼成・土質・色調も、前記三類と近似している。

d類（第1図6・第5図4・7）

口辺部がやや内傾し、倒卵形の胴部を有する深鉢形土器である。口辺部より胴部最大径のあたりまでが文様帯となつており、そこに文様帯を縦に四ないし五等分する様なかたちで沈線による枠状の文様が二帯めぐらされ、各枠状文内は磨消されて一見すると三本の帯縄文が横走する様な感じを与える。枠状文を縦に区劃する部分の帯

縄文内には、偏平な突起などがつけられる場合が多い。又横走する帯縄文は縄文が左傾するのに対し、この部分のみは右傾する縄文の施されていることは興味深い。胴部以下は条線が斜方向に施される。土質は全体にやや粗悪となり、表面がざら〳〵するものが多く、色調は黒褐色、茶褐色を呈する。

e類（第1図3・4・7・第5図10）

形態はb類とほぼ一致する倒卵形の胴部を有する深鉢形であるが、全体として器壁の厚さを増し、作風は一段と粗悪となる。口辺部は内傾し全体的に肥厚する傾向をみせる。口辺部附近は水平に、胴部以下は斜方向に条線が施されるが、紐線文を全く伴わぬ点が著るしい特色として捉えられる。その為安行Ⅱ式の紐線文系粗製土器との類別は極めて明瞭であり、中には第1図4・第5図10に示したような精製土器につけられる文様がみられることは興味深い。色調は赤褐色・黄褐色を呈するものが多い。

f類

口辺より直ちに半球状の円底につらなる椀状の小形土器を一括した。作風からみると精粗の二通りがある様で、精製のものは口辺付近に孤状に懸垂する磨消帯縄文・沈線入組文などの文様を有し、土質・色調はa類〜c類に一致する。粗製のものは無文か平行沈線などを伴うもので、焼成、土質はd類ないしe類の土器と類似する。

以上が姥山Ⅱ式を構成する主要な土器群であるが、これらの中で器形と文様要素との相関々係をみてゆくと、稲妻状磨消文様はa類土器・枠状文はd類土器のみに認められる文様であることが知られ、沈線入組文はa類土器・b類土器・e類土器・f類土器などかなり多くの器形にわたつて施される文様であることが知られる。従つて本式土器を代表する文様は沈線による入組文にあると思われ、稲妻状磨消文、枠状文などは本式を特色づける特異な文様として捉えられるのであり、全体を通じては磨消縄文手法の盛行と云う点が指摘出来る。さらに本式土器の文様要素の中に、安行Ⅲ諸型式にかなり一般的に認められる所の彫刻的三叉文・ないしは三叉状入組文を伴う例がほとんど存在しない点や、(6) 条線文のみの簡素な粗製土器の存在する点は著るしい特色として捉えられる必要がある。

姥山Ⅲ式土器（第1図1・2第5図11～18）

a類（第1図1・2　第5図11）

器形はⅡ式a類土器と全く同一なもので、第1図1に示した様な波状口辺を有する深鉢形土器である。波状口辺部下に沈線による稲妻状の文様を描き、その中に円圏文（第5図11）点列文（第1図1）沈線入組文などを配する点も、Ⅱ式a類土器と共通するが、磨消縄文が全く消滅してしまうことが著るしい差異として注目される。土質は細砂を含むものが目立ち、作風はやや粗悪となる。色調も一部にはⅡ式a類と共通するものが認められつつも、全体的に黄褐色・茶褐色を呈するものが多くなる。

b類（第5図12・13・18）

Ⅱ式c類に類似した平縁の浅鉢形土器である。口辺部に沈線による孤線文（第5図13）円孤文・入組文（第5図12）などを配し、胴部に平行線点列文などをめぐらしたものも認められるが、第5図18の様に全く無文のものも存在する。口唇上には二個の小突起がならんで施されたり（第5図12・13・18）沈線が引かれたりする（第5図12）。本類土器においても縄文の消滅は著るしい特色として捉えられる。土質は化粧土がかけられ器面の研磨されたもの（第5図12）や細砂を含み器面調整の行われぬものなど様々である。色調は灰褐色・茶褐色を呈するものが多い。

c類

沈線による枠状文が口辺部に二帯めぐらされるやや内傾した口辺を有する深鉢形土器であり、器形はⅡ式d類土器と同様であるが、やや小形のものが多くなる様である。本類にあつても縄文が消滅し、単なる沈線による枠状文のみが施される。土質は細砂を含むものも多少みとめられ、全体に粗悪となる。色調は黄褐色・茶褐色を示すものが多い。

d類（第5図15・16）

器形は口辺部が内傾ないし直立して胴部のややふくらんだ深鉢形になると思われる。口辺断面は、多少肥厚するものもあるが（第5図16）肥厚しないものもみられる。口辺部には平行沈線文や連続入組文などが施されるが、ここでも縄文は認められなくなり、胴部以下の条線文も欠く様である。土質はⅡ式e類に共通する粗悪なもので、色調は暗褐色・茶褐色を示す。

e類（第5図17）

小形の深鉢形土器である。素文のものが多いが中には曲線による文様、第5図17の様な沈線による連続入組文の施されるものもある。製作は手づくねによつたと思われるものも認められ、土質は砂を含み粗悪であり、色調は黒褐色・茶褐色を呈するものが多い。

以上が姥山Ⅲ式土器を構成する土器群であるが、ここにみられる文様要素器形のいくつかが姥山Ⅱ式のそれと親縁性を有するものであることは直ちに了解し得る。即ち本式a類土器の文様要素及器形は、Ⅱ式a類土器の、本式c類土器のそれはⅡ式d類土器のそれ〳〵伝統を引くものであることは一見して明らかであり、Ⅱ式を代表する沈線入組文は本式土器においてもやはり主要な文様要素として引きつがれている。Ⅱ式と本式（Ⅲ式）とにおいて相異する点は、器形ないしは文様ではなく、磨消縄文手法の有無と云う点にある。Ⅲ式のいづれの土器においても、縄文の施されたものは全く認められず、本式a類・c類土器のいづれもが、Ⅱ式と同様な文様構成を有しつつも縄文を欠除させていると云う事実は、Ⅱ式とⅢ式を区分する際の重要な差異として捉えられるのであり、筆者には、少く共この場合における縄文の消滅と云う現象は単なる同一土器型式内における文様表出上の変化としてではなく、異つた土器型式を区分する様な性格を持つものであると思う。この点についてはさらに後段において詳論するつもりである。

姥山Ⅳ式土器（第1図5・第5図19～32）

a類（第1図5・第5図22・24・25・32）

器形は口辺がやや内反し、頸部がくの字形にくびれる深鉢形である。口唇上に二個の小突起がつけられたり、口辺裏側に太い沈線が数本めぐらされ、中には蕨手文を描くものもある（第5図・24・25）。内反する口辺部からくびれ部付近にかけてが文様帯となつており、二ないし三本の帯縄文がめぐらされ、各帯縄文間には磨消手法による蕨手文が描かれる。沈線は丸のみで削つた様に太くにぶく、縄文も太く粗いものが多い点は特徴的であり、姥山Ⅱ式の縄文とはたやすく区別出来る。多くは平縁であるが中には波状口辺をなすと思われるもの（第5図24・25）もみられる。この手の土器は小形になるようである。土質は化粧土がかけられた、比較的良好で色調は灰褐色・赤褐色・黒褐色など、かなり変化がある。

b類（第5図19・21・26・27・28・29・31）

口辺部が全体的にやや肥厚した砲弾状の深鉢形土器になると思われるもので、中には口辺が著るしく肥厚し内傾するもの（第5図26）直立するもの（第5図28）などがみられる。左傾する粗い縄文が施され、太くにぶい沈線によつて区劃された帯縄文や（第5図27・31）弧線を上下に引きその内部を磨消したもの（第5図28・29）x字文に近い文様を描くもの（第5図21）など様々の文様がみられる。土質はa類土器とほゞ共通するもので色調は黒褐色・茶褐色・赤褐色などを呈するものが多い。

c類（第5図20）

頸部がやや集約し口辺が外反する変形広口壷になると思われる。口辺部以下胴部にかけてが文様帯となり、太い沈線による帯縄文x字状文或は蕨手文などが描かれる。口唇上に二個の小突起がつけられ、口辺内側に数本の沈線がめぐる。作風に精粗の二通りがあり多少器形も異ると思われるが出土例が少い為明確には捉えられない。土質は美麗な化粧土がかけられたものがみられ色調は黒色・黒褐色を呈する。

d類（第5図30）

台付土器の破片と思われるもので、基台部より推定するとやや下広がりの直線的な基台を有する器壁の厚い大形の台付土器が多かつたと考えられる。文様は太く粗い縄文を磨消した帯縄文、蕨手文などが描かれる。

本式土器の文様は先にも示した如く太く粗い斜縄文を太くにぶい沈線によつて区劃した磨消手法による蕨手文・帯縄文・x字状文などを配し又口辺内側に沈線をめぐらすものも少くなく、これらは極めて特異な文様要素として本式土器と他の土器形式との区分を容易ならしめている。特に磨消手法による蕨手文はa類・b類・c類などの器形に多用され、本式土器の代表的な文様とすることが出来る。又これらの文様の内のいくつかが第5図20に示した様な彫刻的磨消手法に類似した文様表出法をとつている点も興味を引く。

姥山Ⅴ式土器（第2図1～3・第3図1・2・6・7・8・第4図2・3・4・6・7・第6図1～16）

a類（第2図1）

口辺がやや内反ないし外反し胴部がく字形にくびれた深鉢形土器である。口辺はおり返され複合口辺をなすものが多く、複合部分以下胴部のくびれ部までの間は無文

帯として残され、稀には朱が塗布される。口辺のおり返し部分には水平方向・くびれ部以下は斜方面に撚糸がつけられ、底部に近づくにつれ垂直方向となる。底部は安定の良い平底であるが、多少底基部が外にはみ出す傾向があり、稀には木葉圧痕がみられる。口縁に撚糸原体や指頭を直角におしつけて小波状口辺を作るものや口辺部直下ないしくびれ部に小豆大の突起のつけられたものなども存在する。色調は茶褐色を呈するものが多く、土質は細砂を含み焼成はやゝ軟弱である。作製は輪積法によつたものと思われ幅五糎ほどの輪積の痕跡を止めているものもみられる。本類土器は第2図1に示した様な大形土器が多く、個体復元の可能な良好な資料が多数採集されている。

b類（第3図1・2・6・第6図1・2・5・6・8・9・10）

器形はa類と同様な、胴部がく字形にくびれる深鉢形土器であるが、複合口辺を有するものは少なくなる。口辺よりくびれ部にかけてが文様帯となつており、そこに浮線による網状文（第3図2第6図2）、平行沈線文（第3図6・第6図8・9・10）、点列文（第3図1）綾杉文（第6図2）などが配される。又第6図1・10にみられる様な平行沈線を縦横に交叉させて特異な文様を構成させたもの、第6図5・6の様に弧状沈線と点列文を複合させたものも存在するが量的には稀である。[7] くびれ部付近には円形の中凹突起がしばゞつけられることがある（第3図6及第6図1）。くびれ部以下胴部には斜方向の撚糸文がつけられるものが多いが第3図2の様な網状文の施されたものに限つてはけ目がつけられ、撚糸が施されることはない。又唯一例ではあるが網目状撚糸文を有する土器がある。色調はa類土器とほゞ共通し、茶褐色・黒褐色を呈するものが多く、土質は細砂を含み焼成は軟弱なものが多い。

c類（第2図2）

幅三〜五糎ほどの複合口辺を有する砲弾状の深鉢形土器を一括した。口辺のおり反し部分は水平方向、以下は垂直ないし斜方向に撚糸が全面に施される他、さしたる装飾のみられぬ簡素な土器である。中には複合口辺が二段に作出されているものや、撚糸を欠くものなども存在するが量的には少い。色調は赤褐色を示すものが多く、土質は細砂を含み器面はざらざらとしているが焼成は良

好である。本類も多量に出土しており個体復元のなされたものが多い。

d類（第2図3・第4図4・6・7・第6図11～13）

器壁がやや内弯した浅鉢形土器で、口辺部がやや直立するもの（第2図3第4図4）とそうでないもの（第4図6・第6図11～13）とがある。口辺部以下幅5～8糎ほどの部分が文様帯となつており、そこに浮線による連鎖文（第6図12）網状文（第2図3・第4図4・第6図12）匹字文（第4図4・第6図13）或は平行沈線文（第4図6・7第6図11）等が描かれ口辺内側に数条の沈線がめぐつたりする。文様帯全体に朱の塗布された例もみられる。全体的に器壁はうすく、器高よりも口径が大となり、第2図3の様に皿と鉢の中間形態をとるものもみられる。第4図7の様なものは本類土器の内では極めて例外的な形態である。底部にはまれに網代圧痕が存在する。色調は赤褐色・黄褐色・灰褐色・黒褐色など様々で、土質もそれに対応して黒色を呈するものは化粧土がかけられ焼成も硬緻であるが、赤褐色、黄褐色のものは細砂、小石を含み軟弱である。本類も相当量出土しており、個体復元のなされたものが多い。

e類（第3図7・8・第4図2・3）

口径二十糎内外の小形深鉢形土器を一括した。形態は砲弾状を呈するもの、（第3図7・8）胴部の屈曲するもの（第4図3）、両者の中間形態をとるもの（第3図7・第4図2）など様々であり、本来はa類ないしはc類中に含ましむべきものであるとも云えるが、小形土器と云う点でa類、c類の様な大形粗製土器とは一応区別しておくことにした。第3図7の様に口辺に細い隆起帯をめぐらせ指頭あるいは棒状工具による圧痕を加えたものは多少みられるが、複合口辺は存在しない。無文土器の中には表面が研磨され光沢あるものもみられる。

f類（第6図3・4・14・15・16）

本式土器に併出した大洞A式の精製土器と認められるものを一括した。第6図3は台付土器の脚部、第6図4は皿形に近い浅鉢、第6図14・15は台付鉢か小形鉢、第6図16は深鉢形土器の破片と思われる。この他流水文に似た工字文を有する小形壷などが存在する。これらの文様は本式b類・d類にみられる浮線文とは異なり、工字文の範疇に属するものと云えよう。

以上が姥山Ⅴ式を構成する主要な土器群である。文様

と器形の組合せをみて行くと、浮線文は主としてd類（浅鉢形）に多用され、b類（深鉢形）にも多少認められる。平行沈線文は、先の偏平なヘラ状工具による幅広いもの、単なる沈線によるもの、彫刻的に沈刻された溝状のものなどがみられるが、前二者は主としてb類土器に、沈刻状沈線はd類に施されることが多い。この他b類土器のみにみとめられる円形の中凹突起・点列文などがあるが、これらは本式土器を特徴づける文様とは云い難い。粗製土器（a類・c類）には撚糸文が施されるか無文となるものが圧倒的ではけ目の施されたものは極めて少い。粗製土器と同様の器形を有する所謂半精製土器（b類）の胴部にも撚糸文が施されるが、第3図2の様に、浮線文を有するものの胴には撚糸文が施される例はなく、はけ目が施される。

本式土文は出土層位が確認され、かつ極めて多量に出土しており、個体復元のなし得た資料が多く、セットとしての土器の組合せがよく捉えられる。

姥山Ⅵ式土器（第3図3・4・5・第4図1・5・第6図17～30）

a類（第3図4・5）

口辺がやや外反し胴部のくびれた深鉢形土器で、Ⅴ式a類・b類と共通する器形を有するものである。複合口辺をなすものは稀となり、小波状口辺のものが多少認められる他変化にとぼしい。口辺よりくびれ部にかけては無文帯となり、中には第3図5の様に口辺部にはけ目が施される場合もある。くびれ部以下胴部には、はけ目が斜方向につけられ底部付近では垂直方向となる。胴部に撚糸の施されるものは減少する傾向をみせる。無文のものもある。土質は細砂を含むものが多いが焼成は良好で、茶褐色・黄褐色を呈するものが多い。

b類（第6図17・18・19・22・26・30）

器形はa類と同様口辺が外反し胴部のくびれた深鉢形になると思われる。本類でも複合口辺を有するものは稀となり、小波状口辺をなすものが多少認められる。（第6図26）。口辺よりくびれ部にかけてが文様帯となり、沈線による菱状文（第6図17・18）網状文（第6図19・26）連続三角文（第6図22・30）などが描かれ、中には点列文を併用する場合もみられる（第6図17・18）。これらの文様はいづれも沈線によつて描かれるものであるが、一条の沈線によつて描かれるもの、二ないし三条の

平行線によるものなど様々で、菱状文・網状文・三角の各接合部に点刻を施したものも少くない（第6図19・22・25・26・29・30）。胴部以下は第6図18にある様なはけ目の施されるものが多いようである。土質は細砂を含み焼成も比較的良好で、赤褐色・黄褐色を呈するものが多い。

c類（第4図5）

器壁がやや内弯する浅鉢形土器である。口縁は小波状に作出され波頂部にきざみを入れ二又としたもの、平縁で所々に小突起のつけられたものなどがある。口辺部より幅五糎ほどが文様帯となり、沈線による工字状文、弧線文などが施され、以下は無文となる。色調は茶褐色を呈するものが多く、土質に細砂を含むものと含まぬものがあり、砂を含むものの焼成はやや軟弱である。

d類（第3図3）

Ⅴ式c類に類似した砲弾状の深鉢形土器である。口辺部は複合口辺となるものもあるが幅は狭くなるようである。器面全面に斜方向ないし水平方向にはけ目がつけられる。土質は細砂を含むものが多いが焼成は良好で、黄褐色・茶褐色を呈する。

e類（第4図1）

壷形土器と思われるものを一括した。第4図1に示したものはその一例であるが、これは所謂広口壷の形態をとるものと思われる。胴部に四本の平行沈線をめぐらし、円形の中凹突起がつけられる。胴部と頸部の間には三本の沈線による三角状連続文が描かれ、胴部以下には撚糸が施されている。色調は赤褐色を呈し焼成は良好である。この他に、頸部が直立し、頸部に対し直角にはり出した所謂いかり肩を有する大形壷の破片もみられる。口辺部と頸基部に二本の平行沈線をめぐらす他は素文で、赤褐色を呈する。土質は砂を含むが焼成は良好である。

f類（第6図23・24）

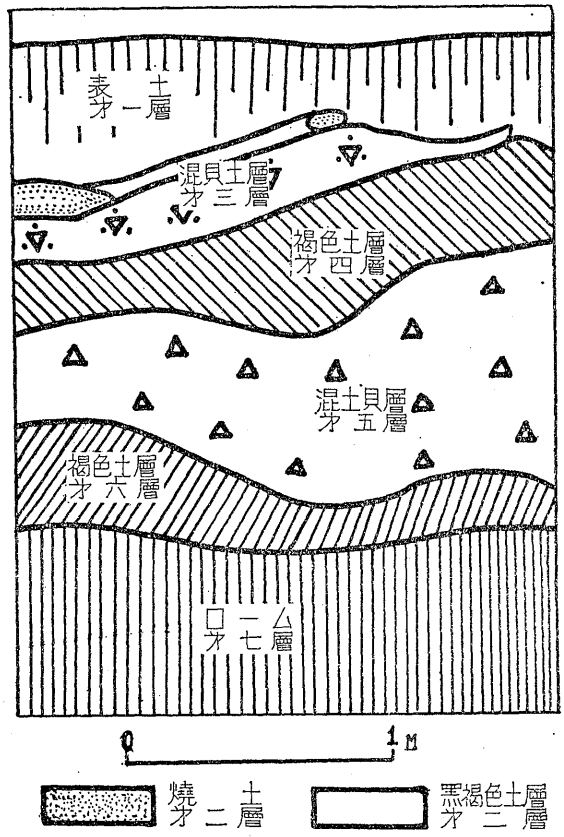
本式に伴出した大洞A′式の精製土器と思われるものを一括した。第6図23は鉢形土器の破片と思われ、第6図24は坩形土器である。24は器壁に化粧土がかけられ研磨され黒色の光沢あるもので、整つた沈刻沈線による連続三角文が描かれており、本式b類にみられる連続三角文、網状文との区別は極めて容易である。

以上が姥山Ⅵ式を構成する主要な土器群である。本式土器は相対的にⅤ式土器にくらべ出土量が少く、はつき

りした器形と文様の組合せを促えることが出来ないが、器形、文様共に姥山Ⅴ式の伝統を引くものであることは確実である。中でもb類土器に多くみられる沈線による連続三角文・菱状文・網状文などは、Ⅴ式の浮線網状文ないし工字文を祖形とし転化した文様であると思われる点は興味を引かれる。さらにⅤ式の網状文ないし工字文は浮線によるか陽刻文であるのに対し、Ⅵ式の三角文・網状文は沈線によつて描かれるものであり、この様な両者の文様表出法の差異は特に注目すべきで、これが実は姥山Ⅴ式とⅥ式を区分する重要な差異であると考えられる。

三、層位に就いて

本遺跡は後世に於ける攪乱を相当受けている部分が多かつたが、幸い第二次調査によつて比較的良好な層序を確認することが出来た。下に示したものがそれであるが、層序は上より七層に分けられる。第一層は表土層もしくは耕作土であり、特に云うべきことは無い。主要包含層は第二層～第六層である。第二層は一部に赤く焼けた焼土のブロックを含む黒褐色の土層である。本層中に含まれる焼土ブロックの性格は十分明らかではないが、恐らくは人為的に推積されたものと思われる。焼土中からは赤く焼けた土器の小破片が出土する。[8] 第3層はやや褐色を帯びた土層で粉砕されたハイガイ・ダンペイキシヤゴなどを少量含んだ混貝土層を形成する。本層の下部にはイノシシ・シカなどの四肢骨・顎骨などが多量に包含され、あたかも骨塚の感を呈するが、獣骨が特にあるまとまりを見せて出土した様な所見は得られなかつた。第四層は褐色土で、貝が混入することがない。第五層は



Z4トレンチ東壁セクション

小形ハマグリ・ダンペイキシャゴを主体とする混土貝層である。第六層は褐色の貝層下土層であり二十～四十糎ほどで第七層のローム層に漸移し、土器の出土は少い。各層共に谷の中心線に向つて傾斜する傾向をみせるが、特に第二層、第三層、第四層は谷に向うにつれて層として発達して来る様相がうかがえる。各層より出土した土器型式と層序との関係を示せば左のようになる。

第一表

層位＼土器型式	姥山Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅲ式	Ⅳ式	Ⅴ式	Ⅵ式
第一層（表土）	○	○	○	○	○	○
第二層（焼土平行層）		△	△	○	○	○
第三層（混貝土層）		△	△	○	◎	△
第四層（褐色土層）		△	△	○	◎	
第五層（混土貝層）	△	◎	○			
第六層（褐色土層）	○	○	○			
第七層（ローム）						

△ 稀　○ 少量　◎ 多量

これによつてみると、姥山Ⅵ式は第一層、第二層、第三層にのみ含まれ、それ以下の層から出土することは無い。Ⅴ式は第一層より第四層までに含まれるが、主要包層は第三層、第四層であり、第五層以下からは出土しない。Ⅱ式及Ⅲ式は各層より出土するが多量に出土するのは第五層であり、これが主要包含層であることが知られる。Ⅳ式は第五層以下には出土しないから、少く共Ⅱ式及Ⅲ式よりも時期的に降るものであることは確実であるが、主要包含層が明確に捉えられず、やや問題が残されている。この様な層位と土器型式との関係からして姥山Ⅰ式→姥山Ⅱ式・Ⅲ式→姥山Ⅳ式→姥山Ⅴ式→姥山Ⅵ式と云う編年系列を想定することが可能となる。

次にこれらの層位に大洞式の精製土器がどの様な形で伴出するかについてみると、第二層及第三層には大洞A及A'式がみられ、大洞A式が量的に多い、第四層は大洞A式、C_2式、C_1式、B－C式などが混在するが、B－C式は一片で他はほゞ等量である。第五層には大洞C_1式、B－C式が伴つており、ここでもB－C式は一片でC_1式が量的に多い。全体を通じては大洞A式が最も多く、次いでC_1式が多く、A'式、C_2式は比較的少い。B－C式は

筆者が現在まで確認し得たものは三片のみであり少い。なお大洞B式は確認出来なかつた。これらはいづれも文様上或は焼成・器形上の特色から一見して大洞式の特徴を備えているものであり、その識別は容易である。本遺跡においては大洞A式よりC_1式にかけての土器片は量的に少なからざるものがあるにもかかわらず、B－C式はわづか三片B式は存在が認められぬと云う点は注目される。この事実は本遺跡出土土器特に姥山Ⅱ式及Ⅲ式の性格を考える上で重要な問題を提起していると思われる。

四　考　察

(1)　姥山Ⅱ式及Ⅲ式に関する問題

先づ姥山Ⅱ式と姥山Ⅲ式との関係についてふれておきたい。先にも述べてある様に、姥山Ⅱ式とⅢ式は第五層（混土貝層）中に主体をなして存在するが、両者は同一層内に混在し層位的相互関係は不明である。それをあえてⅡ式とⅢ式に形態上区分し別個の土器型式差としておきかえた理由は、次の様な点にある。

①　姥山Ⅲ式は姥山Ⅱ式を構成する土器群にほゞ対応する器形のヴアリエーション、文様構成を有すること。

②　それにもかかわらず姥山Ⅲ式においては縄文が全く消滅してしまうこと。

③　②の様な現象は単にある限られたわづかな器形についてのみ起る現象ではなく、Ⅲ式を構成する主要な精製土器群全てにわたつて認められるものであること。

④　所謂安行Ⅲ式を構成する土器群中にあつて、縄文の消滅と云う現象は時期的にみて新らしい型式にみられる特有な現象として従来理解されて来たこと。

①にあげた点を簡単に云えばⅢ式とⅡ式はそれ〴〵独自のセットとして捉え得ると云うことであり、その際のメルクマールとして用いた縄文の消滅と云うことが、③に示した様に、土器型式内での限られた一部の土器にのみ見られる現象とは考えにくい点に基いて、その変化を型式差による変化として捉え、④にあげた様な従来の見解を加味することにより、両者を別個の土器型式におきかえたものである。ただ、姥山Ⅲ式は姥山Ⅱ式にくらべ出土量が少く、必ずしも独立した土器型式としての充分な内容を有するものとは云い難い点もあり、今後の資料の

増加、周辺遺跡の土器との対比によつて、修正さるべき余地もあると思われるが、現在は一応姥山Ⅱ式と分離する所の土器型式であると考えておくことにしたい。

以上の様な、姥山Ⅱ式及Ⅲ式が、所謂広義の安行Ⅲ式の中に包括せらるべき型式群であることは、ほゞ認めて良いと思われる。しかし乍ら従来の安行Ⅲ式の各細分型式と対比させてみた場合、そこにかなりの相異をみせていることも、すでに記した通りである。即ち姥山Ⅱ式においてみられる磨消縄文手法の盛行は、安行Ⅲaないし Ⅲb式にみられる傾向と規を一にするのに対し、彫刻的三叉文ないしは三叉状入組文と云つたⅢa・Ⅲb式を特色づける文様に乏しく、わづかに沈線による入組文にその親縁性が指摘しうるにすぎず、稲妻状磨消文様、連続枠状文と云つた特異な文様構成を有し、さらに、簡素な粗製土器の作風をみればその差異は一層深まるのである。又姥山Ⅲ式においては、磨消縄文手法の消滅と云う一見安行Ⅲc式に対応する様な傾向をみせつつも、文様要素器形の多くは姥山Ⅱ式のそれをほゞ継承しており、なお安行Ⅲc式との差異が、かなり明白に保たれている。少く共、従来の安行Ⅲ式の細分が、彫刻的三叉文ないしは三叉状入組文を規準として行われたと云うことを認めるならば、姥山Ⅱ式及Ⅲ式は、それらの規準によつて律し難い異質性の存在することが認められるのであり、たやすく安行Ⅲ式の細分型式との対比を論ずることが困難である。そしてさらに、従来の編年が、安行Ⅱ式→Ⅲa式→Ⅲb式→Ⅲc式と云う編年系列をたどるのに対し、本遺跡においては姥山Ⅰ式（安行Ⅱ式）→姥山Ⅱ式→姥山Ⅲ式と云う従来より一つ少い編年系列を示していると云う点も当然問題となろう。かかる編年系列の差異の示す所と、本遺跡においては大洞B式は存在せずB－C式に相当する精製土器も極めて少量である点を考慮するならば、姥山Ⅰ式→姥山Ⅱ式→姥山Ⅲ式と云う系列のどこかに、一ないし二型式の土器型式が介在するのではないかと云う疑問が起るのは極めて当然のことかも知れない。この様な疑問をもちつつ、姥山Ⅰ式→Ⅱ式→Ⅲ式と云う土器型式の変遷を検討してみると、姥山Ⅱ式からⅢ式への移行を考えるさいには、そこに第三の型式を介在せしむる余地のほとんど無いことが知られるのであり、多少の疑問として残されるのは、姥山Ⅰ式よりⅡ式への場合であることが理解される。これは換言すれば、安行Ⅱ式

に相当する姥山Ⅰ式と姥山Ⅱ式との間に、安行Ⅲa式もしくは彫刻的三叉文、三叉状入組文を有する土器型式を介在させて考えるか否かと云う問題である。そこで注目されるのが姥山Ⅱ式の文様要素と、安行Ⅱ式のそれとの関係である。

姥山Ⅱ式土器は、しば〳〵述べたごとく、稲妻状磨消文、連続枠状文、沈線入組文などをその主要な文様要素とするものであるが、それらの文様の中で、稲妻状磨消文様及連続枠状文が、安行Ⅱ式の帯縄文系土器の流れをくむものであることは容易に考えられる。すなわち、安行Ⅱ式における扇状突起を有する波状口辺の深鉢形土器には、波状口辺部直下に、隆起した細い帯縄文による三角状の文様が描かれることが多いが、これが沈線によつて描かれれば姥山Ⅱ式の稲妻状磨消文に転化することは極めて自然である。又、同じ帯縄文系の安行Ⅱ式土器の中に、口辺部に二帯ないし三帯の帯縄文が横走し、所々に縦長のきざみ目を有する突起を貼付した深鉢が存在するが、これらの帯縄文の間隔が広がれば、それは姥山Ⅱ式にみられる枠状文となるのである。これらは姥山Ⅱ式土器の文様の多くが、安行Ⅱ式と結びつく要素の多いことを示すものであると思われる。もし姥山Ⅱ式と安行Ⅱ式との間に、安行Ⅲa式的な文様を有する土器形式が介在していたとするならば、それに後続する所の姥山Ⅱ式土器の文様が、安行Ⅱ式の伝統のみを引きついで、安行Ⅲa式を特色づける所の彫刻的三叉文ないし三叉状入組文を継承していないと云う事実を、どの様に解したらよいのであろうか。この様な点に於いて、筆者は姥山Ⅰ式と姥山Ⅱ式の間に、一型式を介在せしむることには否定的である。しかし乍ら安行Ⅲa式は最近安行Ⅱ式との関連に於いて注目されており、[9] 明確な安行Ⅱ式の層位が確認されていない本遺跡においてその様な問題を論ずることはいささか危険を伴うと思われる。又姥山Ⅱ式、Ⅲ式の主体層である混土貝層（第五層）には大洞C_1式が量的に多く伴出している事実は、姥山Ⅱ式、Ⅲ式が大洞C_1式並行型式であることを示しているとも考えられ、これからして姥山Ⅰ式（安行Ⅱ式）と姥山Ⅱ式との間に全く第三の型式が介在し得ぬと断ずることは出来ない。従つてこの点に関しては、本遺跡における安行Ⅱ式の包含層を確認するまで疑問として残しておきたい。

以上の如く姥山Ⅱ式・Ⅲ式に関する限り、従来の安行

Ⅲ諸型式にみられぬ異質性を有し、多くの興味ある問題が山積されている。これらが、関東地方後期末より晩期前半にかけての編年研究にどの様に関係するか、或はこれらが関東地方東南部の地域的現象として捉えられるかについては、全て今後の問題として残され速断はしかねるが、少く共我々の調査成果にみる限り、安行Ⅲ式の細分については今後再吟味さるべき余地のあることが予測される。

(2) 姥山Ⅳ式に関する問題

姥山Ⅳ式土器は、その特異な文様によつて他の土器型式との類別は極めて容易であるにもかかわらず、先にも述べた様に本遺跡に於ける明確な層位を検出し得なかつた。しかし乍ら姥山Ⅱ式及Ⅲ式を出土する混土貝層（第五層）以下よりは出土しないことからみて、姥山Ⅲ式より時期的に降るものであると認められ、これと後述する姥山Ⅴ式及Ⅵ式が大洞A式及A′式並行型式であることがほゞ確実であることから判断して、姥山Ⅳ式土器の編年上の位置は大洞C_1式以降大洞A式以前換言すれば大洞C_2式にほゞ並行する土器型式であることが間接的にたどり得る。西村氏も又荒海第一類土器を、大洞C_2式並行型式として認めておられるが、姥山Ⅳ式土器の、x字状文、蕨手文のうちのいくつかに、彫刻的磨消手法に近似した文様表出法を採用しているものが認められる点からして、姥山Ⅳ式の文様のあるものには、大洞C_1式の影響もある程度考慮する必要があると思われる。

この姥山Ⅳ式土器と類似した様相を持つ土器としては、成田市荒海貝塚第一類土器（前浦式土器）同台方貝塚出土土器、千葉県八日市場市多古田遺跡出土土器などがあり、千葉県下に最近かなり類例を多くみられる様である。西村正衛氏の報文に示された荒海貝塚第一類土器は、姥山Ⅳ式とほとんど共通する内容を持つと認められ、[10] 台方貝塚出土例も馬目順一氏によれば荒海貝塚第一類と共通すると云われるから、[11] これもほゞ同様な性格を持つものとみて良いと思われる。又八日市場市多古田遺跡からは良好な姥山Ⅳ式土器が多数発掘されており、[12] 中には本遺跡の姥山Ⅳ式にはみられぬ新資料もいくつか発見されており、姥山Ⅳ式の内容をさらに豊富なものとしている。恐らく姥山Ⅳ式に関する問題のいくつかは、多古田遺跡の資料を整理した結果さらに明快な解決が下し得ると期待される。

(3) 姥山Ⅴ式及Ⅵ式に関する問題

先づ筆者が、姥山Ⅴ式とⅥ式を独立した土器型式として捉えた根拠は何であるかを述べておきたい。姥山Ⅴ式は明確な層位を有しかつ量的にも多量に出土しており、精粗の土器の組合せも充分捉えられ、文様上の特徴に照して大洞A式に並行する型式であることは明らかであるが、姥山Ⅵ式は出土量が少く層位的ならづけにやや欠ける所があり、型式設定上多少問題が残されている。姥山Ⅴ式とⅥ式を文様上の相異のみでなく、土器型式上の差異として捉えた根拠は左の様な点である。

① 姥山Ⅴ式の匹字文・網状文・工字文はいづれも浮線文によるか陽刻手法によつて描かれるものであり、沈線によつては描かれない。

② 姥山Ⅵ式の連続三角文・工字状文・網状文・菱状文は、浮線ないし陽刻的手法によつては描かれず、沈線ないし沈刻手法によつて描かれる。

③ ①・②の様な異つた文様表出法によつて描かれた二通りの文様を共有する土器は現在の所出土していない。

④ ①及②に示した様な文様は、ある限られた器形にのみ組合されるものではなく、少く共数種類以上の器形にわたつて施されるものであること。

⑤ ②に示した様な文様は①の文様を祖形としそれが変化したものと認められること。

①・②に示した点はⅤ式とⅥ式に於いては文様表出上の技法が異つていることを示すものである。Ⅴ式の網状文・工字文は浮線によるか陽刻文であり、意匠文に対し沈刻された部分は意匠文を浮き立たせる為のネガティブな作用をしている。これに対しⅥ式の三角文・菱状文・網状文においては、沈刻ないし沈線そのものが意匠文としての性格を持つて来るのであり、この場合沈刻された部分は意匠文そのものを構成すると云う意味でポジティブな作用をはたしていると認められる。かかる文様表出上の差異がもし同一土器型式内における文様表出上のヴァラエティーに過ぎないならば③の様な性格を持つた土器片が、かなりの量にわたつて出土しても良いはずであるが、事実はその逆である。さらにその様な二つの文様表出技法が、同一型式内のある特定の器形に対してのみそれぞれ施されると云う傾向は④に示した如く指摘し得ない。従つてに①・②示した様な文様表出技法の差異はそ

れ〳〵異つた土器型式を代表する差異として捉えらるべきものであると考えられるのである。⑤に示した点はもはや説明する必要もないことと思われるが、一応第6図2と第6図26の文様を参照され度い。第6図2には口辺直下と胴部に浮線による網状文が配されているが、それはすでに直線化し、菱状に近づいている。しかも網状文の接合部には第6図26にみられる様な点刻が早くも施されているのであり、網状文が沈線によつて描かれればそれはたやすく第6図26の様な沈線網状文に転化し得ると思われる。この他Ⅴ式とⅥ式を分離する際の重要な問題となり得るものに粗製土器の胴部文様があげられる。姥山Ⅴ式を多量に出土した第四層の粗製土器には殆んど撚糸が施されるか無文となり、はけ目の施されるものは数個体分を越えない、それに反してⅥ式を伴なう第二層・第三層から出土した粗製土器には、はけ目の施されたものが増加し撚糸の施されたものとほゞ等量になる。この事実は明らかにはけ目の施された粗製土器が撚糸の施されたものよりも時期的に後出するものであることを示していると思われる。以上の様な諸点によつて、姥山Ⅵ式を姥山Ⅴ式の文様要素・器形等を変形させつつ継承した土器型式として設定した次第である。

この様な姥山Ⅵ式に近似した様相を持つ土器として考えられるものは、成田市荒海貝塚c種及d種土器があげられる。西村氏の報告によつて示された荒海c種及d種土器と、姥山Ⅵ式を対比させてみるに、連続三角文・菱状文・沈線網状文などは両者共通するが、荒海d種土器中で特に曲線を多用したものは、本遺跡にあつては第6図27・第4図1に示したものの他類例に乏しい。姥山Ⅵ式土器の文様の多くは直線によつて構成され、曲線を用いたものは稀である。この差異が姥山と荒海の地域的ないし遺跡による差異であるか、或は土器型式そのものの差異であるか速断は許されないが、姥山Ⅵ式土器は量的にやや乏しく、かつその主要包含層が未調査として残されている関係上、おそらく我々の姥山遺跡の次回の調査によつて両者の差異は漸次うずめられるものと期待される。それ故姥山Ⅵ式と荒海c種及d種土器は、筆者はほゞ同一な土器型式であると考えたい。

以上、文様表出技法の差異を中心として姥山Ⅴ式と姥山Ⅵ式がそれ〳〵独立した土器型式であることを立証しようと試みたが、その結果ははからずも西村正衛氏の提

唱された荒海式の型式設定を再確認することになり、あわせて関東地方縄文文化終末期に関して、具体的な問題を捉えることが出来たのは幸いである。

五　結　語

以上山武姥山貝塚の晩期縄文土器を六つの型式群に類別し、そこから生じた二、三の問題について卑見をのべたが、それ等を要約すれば左の様になる。

(1) 山武姥山貝塚の安行Ⅲ式相当型式である姥山Ⅱ式及Ⅲ式には、従来の安行Ⅲ細分型式にみられぬ異質性が多分に認められ、たやすく両者の型式対比がなし得ない。この様な点から、現状では安行Ⅲ式の細分基準を再吟味する必要がある様に思われる。

(2) 姥山Ⅳ式土器は、西村氏の報告される前浦式土器に同定されると思われ、時期的には大洞C_2式に並行する土器型式と思われるが、その前後に位置する土器型式との連関、土器型式の内容そのものについてはいまだ不明な点があり、今後の調査を必要とする。

(3) 姥山Ⅴ式土器は文様上の特色からみて大洞A式に並行する土器型式と認められ、確実な層位を有し、かつ量的に多量に出土しており、土器型式として極めて充実した内容を有するものである。

(4) 姥山Ⅵ式土器は西村氏の提唱された荒海c種及d種土器に示された文様を含むものであり、姥山Ⅴ式土器に後続する所の晩期最末期に位置する土器型式であると認められる。

これらの成果はそれぞれの中に未解決の問題を多少なりとも含むものであり、山武姥山貝塚の調査はいまだ継続中であるから、今後の調査成果によつて細部に修正が加えられることも予想される。筆者の浅学の故に諸々に誤解を生じている点もあろうかと思われる。この卑見をあえて陳開することにより多くの先学諸氏より御叱正を給わることはもとより筆者の強く願望する所である。終りにのぞんで、本稿作成に当つて常に温情ある御理解と御指導をおしまれなかつた清水潤三教授、竹下次作氏、近森正学兄、さらには実測図作成、土器整理に助力をおしまれなかつた学友風巻義章、赤沢威両君、地主小川文雄氏に深く感謝の意を表したい。本稿はこれらの方々の御指導、御助力なくしては完成し得なかつたからである。

（昭和卅七年十一月稿・卅八年三月一部補訂）

註

(1) 本貝塚の字名は台であり、貝塚名称としては不適当である。又杉原荘介氏のように姥山台貝塚とすると市川市姥山貝塚と混同される恐れもあるので郡名を冠して山武姥山貝塚と呼ぶことにした。今後の略称はこの名称に統一したい。

(2) 本稿は、当時の研究討論会の内容についてはふれていない。

(3) 清水潤三「千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究（予報）」史学三十二巻一～四合併号。

(4) 貝塚をなす地点は晩期前半の土器型式（姥山Ⅱ・Ⅲ式）を出土するのであり、厳密に云えば貝塚とそれに連なる包含地より遺跡が構成されている。

(5) この他表土層等に混入して阿玉台式・堀之内式・加曽利B式・安行Ⅰ式等の破片も多少認められる。

(6) 本貝塚出土の土器片中所謂安行Ⅲa式にみられる三叉文の範疇に属すると思われるものとしては第5図6に示したもの以外認められない。又明らかに安行Ⅲa式と認められる文様を有する土器片は数片を数えるに止る。そして何より注目する必要のあることは、姥山Ⅱ式を構成する全土器群中に、三叉状文が共存する例がないと云う点である。それ故第5図6の様な土器は、姥山Ⅱ式のセットの中に組込まれる土器ではなく、本遺跡の大洞系精製土器片の様に、伴出関係とみるか、或は混入として処理するしかない様に思われる。

(7) 第6図5・6の様な土器は、或は姥山Ⅵ式に伴うものであるかも知れぬと考えている。

(8) 焼土中より出土した土器は姥山Ⅰ式よりⅥ式まで各型式が入りまじっており一定の性格が捉えられない。

(9) 安行Ⅲa式が安行Ⅱ式と極めて深い関係を有するものであると云う考えは、潜在的に多数の人に持たれているらしい。江坂輝弥氏の編年表などに安行Ⅱ式とⅢa式を一括して記入されている点などはその一つの現われとみて良いであろう。（世界考古学大系第一巻巻末の図表参照）又井沼遺跡の場合なども具体的な実例の一つとして考慮する必要がある。（安岡路洋・早川智明「井沼遺跡」埼玉県立文化館）

(10) 西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚――東部関東地方縄文文化終末期の研究――」古代第三十六号。

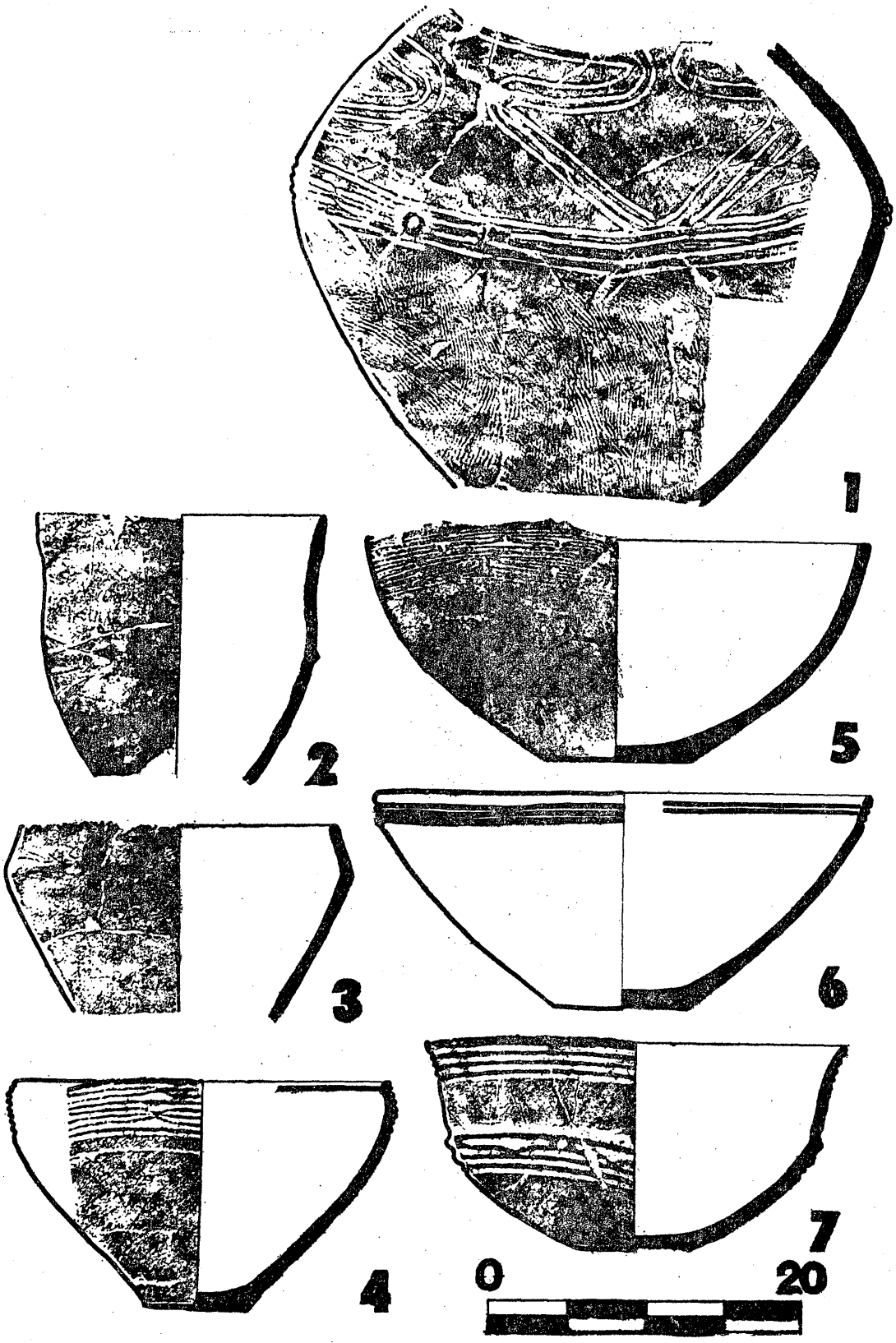
(11) 「鈴声」第六号　早稲田大学考古学研究会連絡紙。

(12) 昭和卅七年二月水田の区劃整理によって発見され、慶応義塾大学考古学研究室が調査を行った。

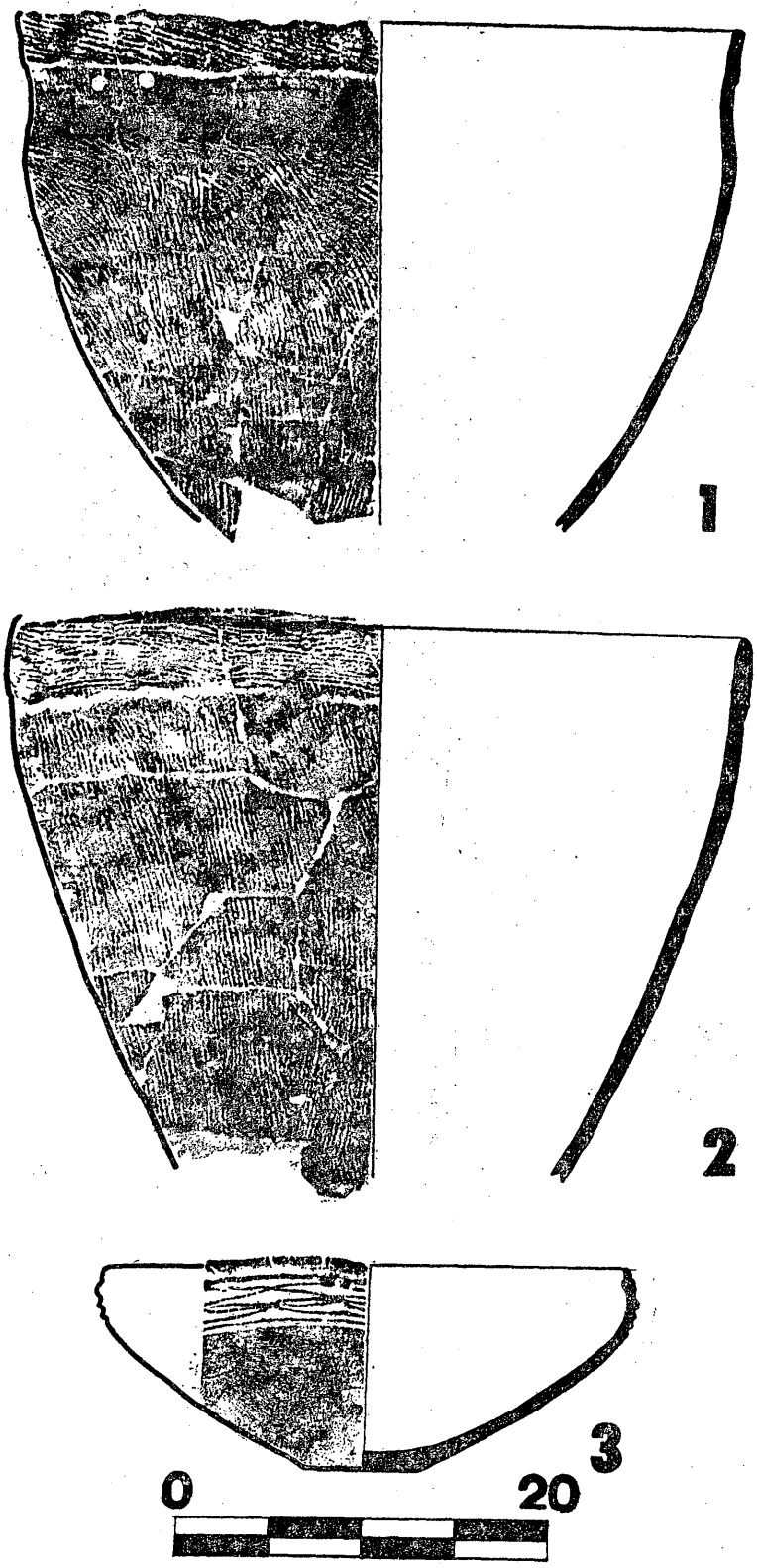
(13) 西村正衛「前掲論文」。この他本式に類似した文様を有する土器としては、福島県御代田遺跡出土土器中に一部類例が認められる。（目黒吉明「福島県田村郡御代田遺跡について」東北考古学第三輯）

付　記

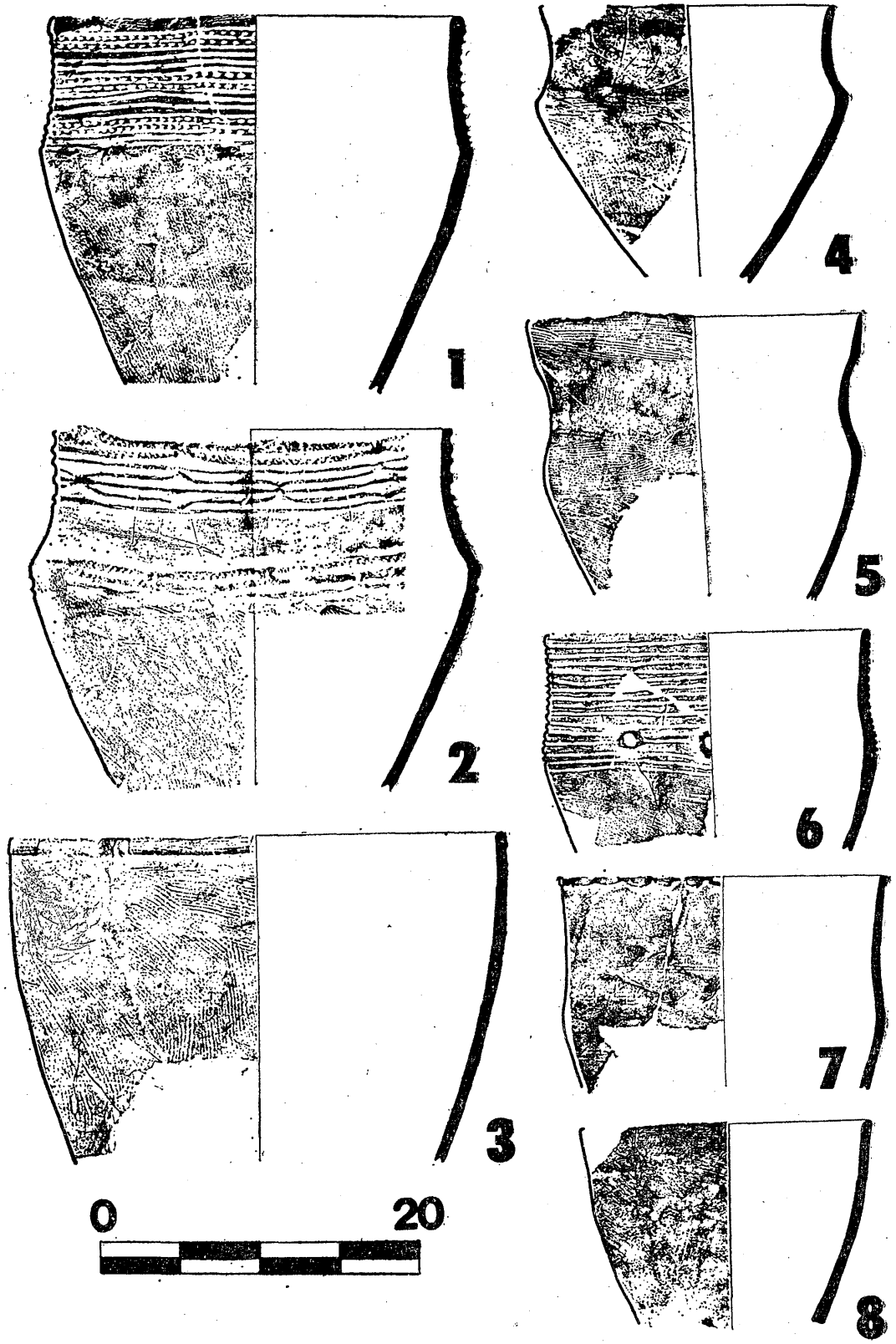
本稿校正中に、杉原荘介、戸沢充則両氏による「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」（考古学集刊二巻一号）に接した。両氏は右報文中において、姥山Ⅳ式に相当する杉田B類土器（所謂前浦式土器）を、安行ⅢC式に伴出するものであるとされ、両者を杉田Ⅰの名称の下に統一して理解し、又大洞C_2式に近似する杉田C類土器をば、杉田Ⅱとして、「大洞C_2式土器そのものの南関東における在り方」としてとらえられた。（報文二八頁）それ故、姥山Ⅳ式の編年上の位置・大洞式土器との伴出関係に対する両氏の見解は、筆者のそれとは多少異るようである。この点に関してはいづれ機会をとらえて詳論するつもりであり、今回はふれずにおくが、筆者としては、姥山Ⅳ式土器は、安行ⅢC式とセットになる土器型式ではなく、又それに伴出する大洞式土器は、杉田C類土器の如き大洞C_2式そのものであると云う見通しを、吾々の調査した多古田遺跡の例から抱いていることを付記しておく。なお筆者の土器の処理のしかたは、土器を一つの型式のセットとして捉えると云う立場に立つて行うものであり、その様な点からも両氏の見解には疑問が提示し得ると思われる。



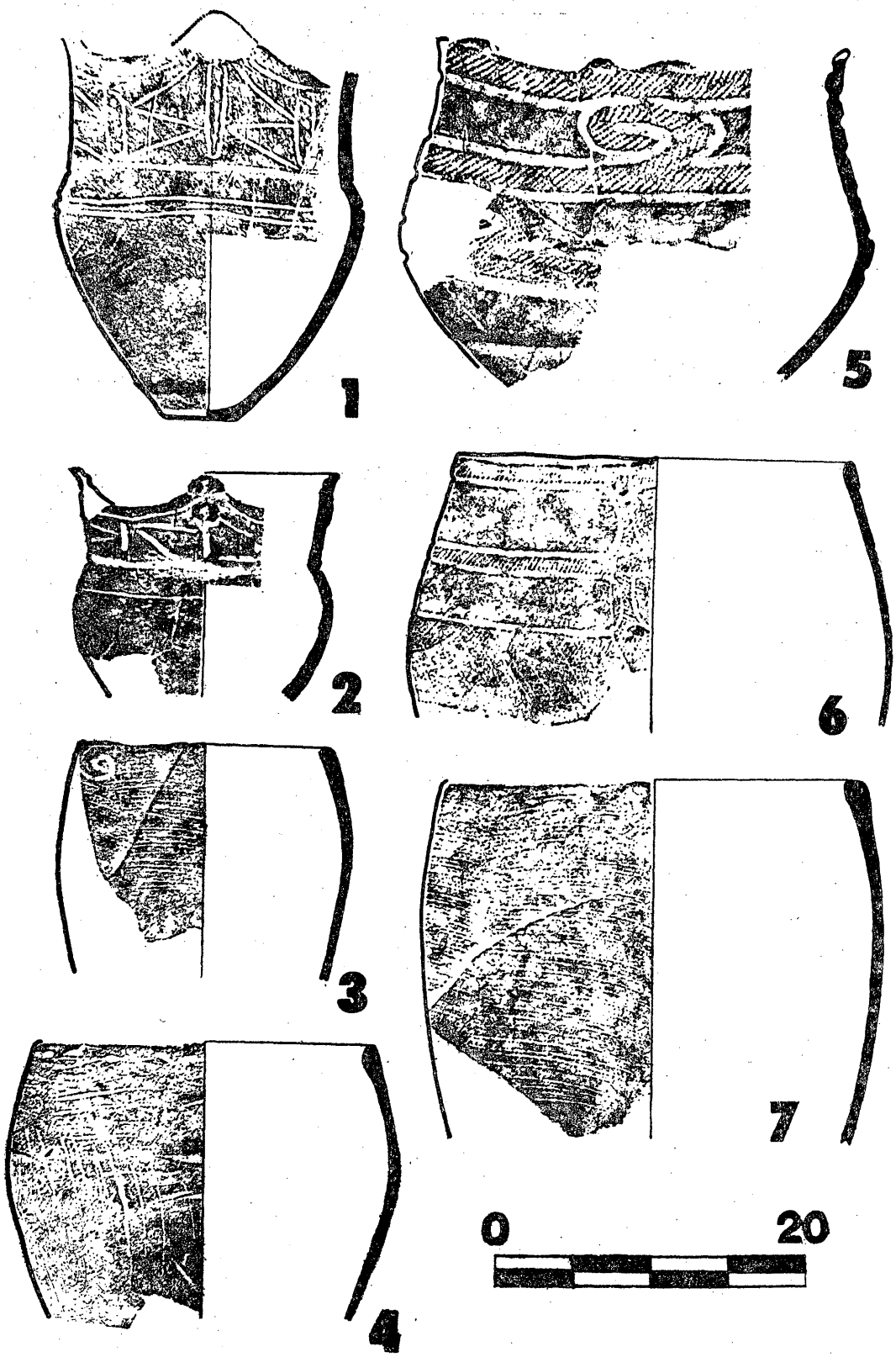
第1図　姥山Ⅱ式（3･4･6･7）姥山Ⅲ式（1･2）姥山Ⅳ式（5）



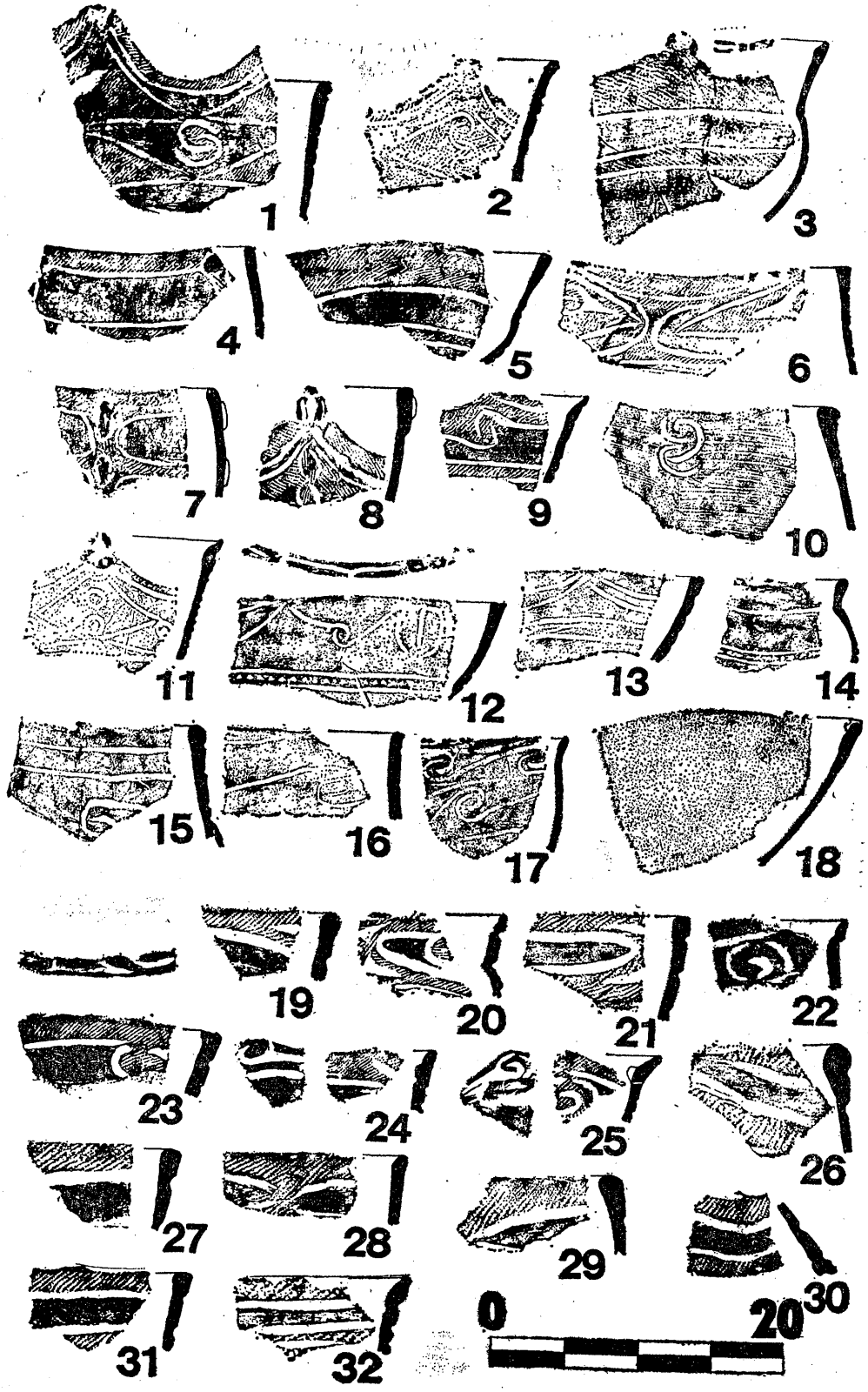
第2図　姥山Ⅴ式（1～3）



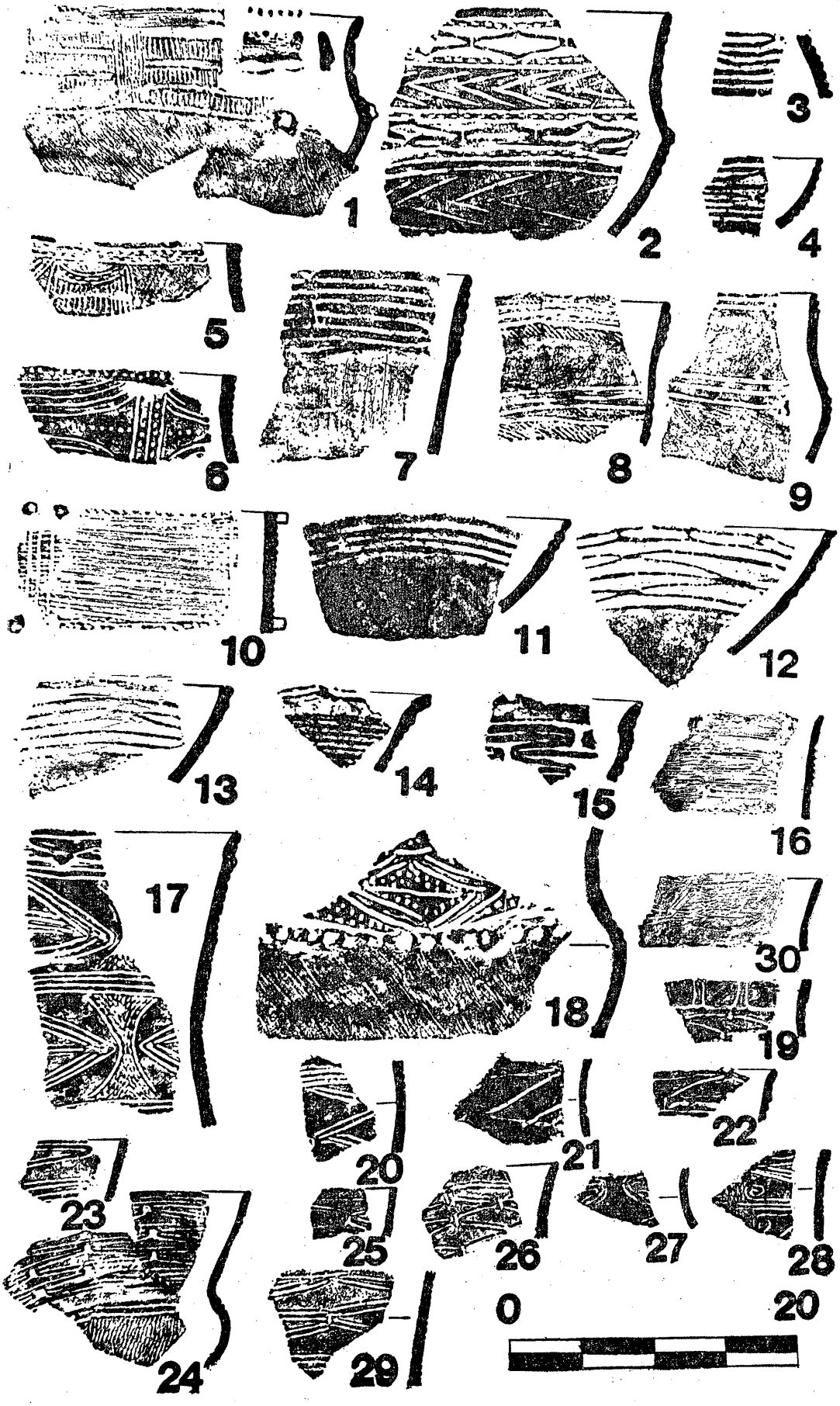
第3図　姥山Ⅴ式（1・2・6～8）姥山Ⅵ式（3～5）



第４図　姥山Ⅴ式（2～4・6・7）姥山Ⅵ式（1・5）



第５図　姥山Ⅱ式(１～10)姥山Ⅲ式(11～18)姥山Ⅳ式(19～32)



第6図　姥山Ⅴ式（1～16）姥山Ⅵ式（17～30）